

ミャオ語文法ノート～羅泊河ミャオ語の人称詞について

田口善久

0. 本稿の試みについて

本稿は、羅泊河ミャオ語（以下紛れのない場合には、単に「ミャオ語」ということにする）の文法スケッチの一環として、その人称詞について記述を行うものである。¹

本稿で、文法スケッチ作成のために行ったことを以下に簡略して述べる。まず、データ作成について。データの作成に向けて、ミャオ語の話者による語り（モノログとインタビューの2種類がある）の録音と、ミャオ語の話者に対する聞き取り（話者による他言語からミャオ語への翻訳、話者による自由作例、筆者による作例を話者が修正したもの3種類がある）を行った。これらのデータ作成の段階においては、音声的素材を、田口(2008)で提示した音韻的な単位によって、記述することが中心的作業である。² データの分析に向けては、上記の方法で得られたデータを、改変して話者に提示し、当該改変がデータに引き起こした変化を報告してもらうことを最も重要な実験方法として使用した。この実験方法から得られるほぼ唯一の結果は、話者による「容認可能性」の報告である。「容認可能性」とは、反復的に現れる音韻的な単位（これをチャンクとよぶ）を使用できる言語的環境（文脈あるいは場面）が話者にとって想起できるかどうかである。実際には、話者に当該チャンクを使用する場面を指摘してもらったり、前後の文脈を作例してもらったりすることで、該当する言語的環境の存在を確認した。また、話者による語りのデータの場合には、問題となるチャンクは常に文脈を持っていると考える。³ 本稿では、この話者による報告を、そのチャンクが当該言語の文法に属するかどうかについての分析者の判断の根

¹ 本稿が行おうとしている「文法の記述」は、残念ながら、科学的研究といえるようなレベルにはない。これは、筆者の研究で得られたデータの量、データの取得方法などにまず起因する。たとえば、本稿で使用するデータを繰り返し得ることができる条件については、研究対象の全数調査あるいはランダムな標本抽出を行っていない以上、特定のコンサルタント群に取材すること以外に提示できない。また、個別言語の記述における様々な環境要因についてうんぬんする以前に、筆者は、現在の言語学が行っている文法研究が科学的研究であると称するのは時期尚早であると考えているということもある。何をもって、ある言語のあるチャンクを個々の文法に属するものと判断するのか、個々の文法のカテゴリの設定法やその記述法など、すべては未だ手探りの状態にあると筆者は考えている。本稿が目指すのは、できるだけ理論的な負荷をかけない形で、言語状況を提示することである。そのために筆者が行ってきたのは、対象言語におけるチャンクを、そのふるまいにおいて接辞、接語、語、複合語、句、文などのレベルに振り分けることであり、また語については、「詞」という語類に分類することである。本稿で扱う、人称詞はそのうちのひとつである。これは、分布に基づいた非常に古典的な記述法であるが、これによって得られた単位たちが、言語記述の単位として妥当なものなのかは現段階では分からない。したがって、文法の印象的記述という意味で「スケッチ」という表現を使用する。スケッチを書き溜めたノートブックを作成するという意味で、本稿のタイトルもこのようにしてある。

² ただし、田口(2008)でお願いした話者の音韻体系と、今回聞き取りの作業でお願いした話者群の音韻体系には違いがある。この違いの分析については、別の機会に報告したい。

³ 本稿では、ある一人のコンサルタント（1.2節で紹介する宋雲氏）に、すべての語り（彼自身が語り手である場合を除く）を聞いていただいて、容認可能性について報告していただいた。

拠とする。ここが、言語についての仮説を検証するための、理論と現実のインターフェイスである。この報告は、理論的には、容認可能か容認不可能かの二者択一である。しかし、言語環境の想起は、容易な場合からはなはだ困難な場合までさまざまであり、困難な場合には、報告そのものが曖昧になることや、複数回の実験の間に変化することもよくあった。話者間で報告が不一致になることも稀ではあるが発生した。このこともまた記述の対象とした。また、容認可能性の報告のほかに、もし意味や用法に変化があれば、これを報告してもらった。⁴

1. 羅泊河ミャオ語と本稿のコンサルタント・表記について

1.1 羅泊河ミャオ語について

本稿の記述の対象である羅泊河ミャオ語については、田口（2008）にすでに述べた。羅泊河ミャオ語は、ミャオ・ヤオ語の研究史上では、Central Miao (Purnell 1970)、川黔滇方言羅泊河次方言（王輔正 1994）という分類名称でよばれているものに相当する。筆者の分類では、ミャオ・ヤオ語族、ミャオ語（派）、西部ミャオ語（群）に属する言語であり、系統樹上の一つの節点を占めるタクソンである。⁵ この言語を研究するために本稿が取材する、具体的なレクト（地点言語）は、中国貴州省開陽県高寨郷の数か村においてミャオ族によって話される言語である。これらの村は、互いに通婚などにより密な関係を保っている一方、他の地域から清水江によって隔たった位置にあり、他地域のミャオ族から jaAtshoA (jaA「8」、tshoA「村」) とよばれており、社会的にも言語的にも一つの言語共同体を構成していると判断している。⁶

1.2 本稿のコンサルタント

本稿のデータ（5人の話者による語りのテキスト35話及び3人の話者からの聞き取りによる例）は、2001年以来十数回の現地調査によって収集したものである。本稿では、語りのテキストの話者をAからEまでのアルファベットで示す。彼らの出身地は、高寨郷に属する自然村である、窩甫、光中、後寨である。本稿の聞き取りのコンサルタントは、光中出身の宋雲氏、馬史出身の張明勇氏、丫口田出身の梁軍氏である。馬史と丫口田も高寨郷に属する自然村である。このうち、宋雲氏は、本稿の中心的なコンサルタントであり、すべてのテキスト及び例のチェックに携わってくださっただけでなく、語りのテキストの聞き起こしについても筆者を助けてくださり、さらにテキストについての質問にも答えていただいた。本稿で提示するミャオ語は、宋雲氏のイディオレクトに最も近いと言わなければならない。そのほかの方は、すべての例ではないものの、大変多くの項目をチェックしていただいた。ここに、宋雲氏をはじめとするコンサルタントの方々、およびその家族の方々に心より御礼申し上げたい。さらに、調査中にお世話になった、開陽県の民族宗教局の方々、高寨郷の政府の方々、筆者が訪れたミャオ族の村の方々にも御礼申し上げたい。

1.3 本稿の表記について

本稿では、筆者が考案したローマン・アルファベットによる表記法を使用する。本稿の末尾に、子音、母音、

⁴ 少し考えてみれば分かることだが、このような報告は誰にでもできるようなものではない。本稿のコンサルタントは全員現役教員または元教員である。当該言語集団のこれ以外のメンバーに同じ仕事を依頼した場合に、同じ結果が得られるかどうかは分からない。本稿のコンサルタント群は、筆者が自らの仕事の結果が簡便に得られるように恣意的に選択した話者たちであることは否定できない。

⁵ ミャオ語の系統分類については、田口（2015）に基づいている。

⁶ ただし、各村が言語的にどの程度差異があるのかは未調査で不明である。

声調などの表記の解説を付した。

例の表示は以下の2通りのやり方で行う。

(1) 改行して、3行ないし4行で表示する場合

第1行：ミャオ語

第2行：グロス

第3行：日本語訳

第4行：(もしあれば) 聞き取りに使用した漢語表現

以下に各行について説明する。

第1行：ミャオ語について

ミャオ語の表記について、簡略して述べる。聞き取りの場合には、それぞれの例は、言いきりの文の形式であるか、自立して発話できる表現とする。筆者により改変された例に対して、コンサルタントが容認不可能の報告をした場合、当該例の先頭にアスタリスク(*)を1つ付ける。一方、語りのテキストの場合には、イントネーションを考慮しつつ、文に切り分け、ピリオド(.)を末尾に打つ。その後、文中に現れるポーズと文の構成を考慮しつつ、カンマ(,)を打つ。⁷ 文中では、語ごとに分かち書きする。⁸ 束縛的語幹及び接語の場合には、必要とする自立的な語の方向にハイフン(-)をおいて表示する。また、複合語の構成要素及び接辞は、分かち書きせず、語の中でハイフンを入れて表示する。なお、テキスト中の言い淀みはピリオドを3つ打つこと(...)で示し、発話内容が聞き取れず、データ化できない部分は、アスタリスクを3つ打つこと(***)で示す。

第2行：グロスについて

グロスは基本的に英語で記す。グロスにおける略号は以下の通り。⁹

1：一人称	2：二人称	3：三人称	CLF：類別詞
COP：コピュラ	DEM：指示詞	DU：双数	FLL：フィラー
LOC：場所詞	MO：-moA ¹⁰	NEG：否定	PL：複数
PN：固有名	PRT：助詞	RCP：相互	SFP：文末助詞
SG：単数			

第3行：日本語訳について

⁷ 現段階では、ピリオドやカンマの付与については、明確な根拠に基づいたものではなく、印象的なものでしかない。

⁸ 本稿での、語や接辞の認定方法について簡略して述べると、以下のようである。語を、単独で使用する言語的環境(文脈あるいは場面)が存在する最小のチャンクとする(Sweet 1875/6)。語ではないものは、語彙的な意義を中心的 content としてもつか、文法的意義を中心的 content としてもつかという意味的な基準で、前者は束縛的語幹とし、後者は、接語あるいは接辞とする。接語と接辞は、そのホストのありようが重要な基準であり、特定語類に間に他の要素を介在させずに直接共起するものを接辞とよぶ。以上は、理念的なものであり、個別の語や接辞には多様な状況がみられる。

⁹ グロスのいくつかの術語については定義が必要であるが、それについては、稿を改めて論じることとする。

¹⁰ -moA は、名詞修飾の標識である。

日本語訳は「 」に入れて示し、語りのテキストからの引用の場合には、筆者が便宜上付けたテキストのタイトルを『 』に入れて示す。

第4行：聞き取りに使用した漢語表現について

聞き取りの場合、筆者が提示する漢語の文を、コンサルタントがミャオ語に翻訳したものがある。この場合に使用した漢語の文を[]に入れて示す。¹¹

(2) 一行で表示する場合

先にミャオ語を示し、その後の<>で括った中に、以下の仕方で、グロスを表示する。

四角記号「◇」1つでミャオ語の音節1つを表す

四角記号「◇」の直後に、四角記号の個数分の音節からなる表現に対するグロスを記す

2. 人称詞の形式

人称詞は、人称と数によってパラダイムをなす語類で、直示的な指示を行う（三人称については前方照応的指示をも行う）語類である。人称詞は、動詞の周辺に出現する位置においては、名詞と同様のふるまいを見せるが、類別詞が先行する順序で、類別詞と共に起ることができず、関係節の修飾も受けない点で名詞とは異なるふるまいを見せる独立の語類である（人称詞の統語論的性質については3節で述べる）。

2.1 人称詞のパラダイム

ミャオ語の人称詞は、表1のようなパラダイムによって示される。

表1

	単数	複数	双数
一人称	kanB	kanB-naB	
		piA-naB (piA-)	puAdanB
二人称	ronA	ronA-naB	
		miA-naB (miA-)	muAdanB
三人称	niB	niB	
		nthonC-naB	-

2.2 複数を表す諸形式について

表1からわかるように、ミャオ語の複数の形式は3種の人称それぞれにいくつか存在する。¹² 通常使用される形

¹¹ 漢語の文については、李林静氏にチェックしていただいた。ここに謝意を表する。

¹² 一人称複数と二人称複数の2音節の人称詞においては、最初の音節は弱音節で発音されることがある。弱音

式は、-naBという、名詞の複数形式にも使用される接辞を付加することによって形成される。接辞付加を受ける形式は、単数形式（kanB, ronA）と、複数の専用形式（piA-, miA-, nthonC-）がある。

さて、一人称と二人称の複数形式については、それぞれ3つずつ形式が確認される。以下に、全35話のテキストにおける一人称と二人称の複数形式の使用状況を、当該形式が使用されたテキスト数で示す（ただし、単独の人称詞として直示的用法で使用されている場合のみを数える¹³⁾）。

表2

一人称複数			二人称複数		
形式	話者（出身地）	テキスト数	形式	話者（出身地）	テキスト数
kanB-naB	話者A（高甫）	2	ronA-naB	話者E（後寨）	2
	話者B（高甫）	8		話者A（高甫）	1
	話者D（光中）	1	miA-naB	話者B（高甫）	2
	話者E（後寨）	4		話者E（後寨）	4
piA-naB	-	0	miA-	話者E（後寨）	3
piA-	-	0			

まず、単音節形 piA-, miA-については、すべてのコンサルタントが単独での使用を容認不可能と報告した（ただし、表2にあるように、語りのテキストでは二人称の単音節複数形式 miA-が一人の話者によって使用されている）。一方、piA-, miA-は、数詞と類別詞の構成の直前の環境においては使用される（これについては2.3節で述べる）。2音節形式の kanB-naBとpiA-naB、ronA-naBとmiA-naBの違いについては、確かなことは分かっていない。一人称については、談話では、筆者の出会ったすべての人が kanB-naBを使用する様子であり、テキストでもこれが唯一確認される形式であるが、コンサルタントたちは一様にpiA-naBも使用できると報告している。次に、二人称の複数については、テキストでは、miA-naBがよく見られるが、談話では、ronA-naBも使われる様子である。テキストの話者はすべて2016年現在で50歳以上であり、コンサルタントのうち、miA-naBを使うという意識のある話者は一人で、70歳台である。一方、ronA-naBを使うという意識のあるコンサルタントは二人で、40歳台である。これらのことを考慮すると、年齢による差異である可能性もある。

三人称については、数量の表示を曖昧にすることができ、単数でも複数でもniBを使うことが可能な様子である。特に、人間ではないものを指示する際には、この傾向が顕著である。つまり、niBは、単数複数を超越した三人称の形式であるといえる（この点については2.5節で述べる）。一方、指示対象が人間で、複数であることを意識する場合には、nthonC-naBが使用される。

次に、一人称複数の形式に排除式と包括式の対立は存在しない。以下のような聞き取りによる例を参照する（以

節については、付録に説明がある。

¹³⁾ 二人称複数の人称詞は、慣用的表現に現れることがあるが、それは除外する。

下の例では、人称詞を太字で示す。スラッシュ記号 (/) はその前後の要素が同じスロットに位置することを示す)。

(a) 排除の意味の場合

(1) ronA nnjonA teeAnonB donB, **kanB-naB/piA-naB** aC ciBdiA muB.

2SG be.at here wait 1PL do front go

「あなたはここで待っていてください、私たち先に行きますので。」

[(有三个人在, 其中两个人对另外一个人说) 你在这儿等, 我们先去。]

(b) 包括の意味の場合

(2) **kanB-naB/piA-naB** aCchiB muB.

1PL together go

「私たち一緒に行きましょう。」

[(有三个人在, 其中两个人对另外一个人说) 咱们一起去吧。]

排除の意味の場合にも、包括の意味の場合にも、**kanB-naB**と**piA-naB**は使用でき、対立がないことが示唆される。

2.3 双数を表す形式について

一人称と二人称にのみ双数形が存在する。**puAdanB**「一人称双数 (1DU)」と **muAdanB**「二人称双数 (2DU)」である。双数形は、対象の数量が2である場合に使用することができる。ただし、この場合、双数形の使用は義務的ではなく、複数形を使用することも全く自然である。テキストに現れた双数形の例を参照する。

(3) niB-siB zroC-seA, aA-tanA qweA -tsaB, jeB **puAdanB** muB ...muB -seB.

3-wife tell child good PRT FLL 1DU go go SFP

「彼の妻は言った。「この子は大丈夫だから、私たち先を急ぎましょう。」」『食人族』

ここでは、妻が夫に対して、自分たち夫婦二人を一人称双数の人称詞で指示している。次の例は、一文ずつの対話になっている。

(4) **muAdanB** luB -waC.

2DU come SFP

「お前たち戻ってきたんだね。」

aA, luB -waC.

yes come SFP

「はい、戻ってきました。」『山姥 (2) 』

ここでは、外出していた一組の夫婦に対して、二人称双数の人称詞が使われている。双数形は、夫婦のような社会的に二人であることが慣習化されているものを指すことが多いが、それには限定されない。以下のような例を参照する。

(5) kanB thonB tuC luB **puAdanB** taCcaB nonA.

1SG look.for obtain come 1DU everyone eat

「私が（女の子を）見つけるから、一緒に食べようじゃないか。」『山姥（1）』

この例では、山姥が、自分と自分の家の猫に対して一人称双数形を使用している。

なお、puAdanB「一人称双数」にも、排除式と包括式の区別はないようである。以下の聞き取りの例を参照する。

(6) ronA njonA teeAnonB donB, **puAdanB** aC ciBdiA muB.

2SG be.at here wait 1DU do front go

「あなたはここで待っていてください、私たち先に行きますので。」

[（有两个人在，其中两个人对另外一个人说）你在这儿等，我们俩先去。]

(7) **puAdanB** aCchiB muB.

1DU together go

「私たち一緒に行きましょう。」

[（有两个人在，说话人对另外一个人说）咱们俩一起去吧。]

排除の意味の場合にも、包括の意味の場合にも、puAdanBは使用でき、対立がないことが示唆される。¹⁴

¹⁴ ただし、本稿のコンサルタントのうち、70歳台の話者から、排除式専用の形式 niB puAdanBがあるという報告をいただいた。一方、他のコンサルタントたちは、その形式を容認しない。これは、テキストにも確認されない。これは年齢による変異形である可能性があるが、詳細は不明である。以下の例文を参照する。

niB **puAdanB** aC ciBdiA muB. ronA aC teeBqwinA daA.

3 1PL do front go 2SG do back come

「私たち二人は先に行きます。あなたは後から来てください。」

このコンサルタントによれば、この例のように、排除の意味の場合にのみ、この形式が使用できる。この形式は、三人称単数の人称詞と一人称双数の人称詞を並べたものであり、三人称に言及することで、二人のうちの片方が聞き手ではないことを示していると思われる。他方、二人称単数の人称詞に一人称双数の人称詞を並べた*ronA

次に、双数形の通時的な側面について考察する。puAdanBとmuAdanBは、以下に示すように、＜複数人称詞単音節形+数詞「2」+類別詞＞と言う構成に由来すると思われる。すなわち、＜複数人称詞単音節形+数詞「2」＞の部分が、piA- wwua- > puA、miA- wwua- > muAのように単音節化したものである。

一人称	piA-	wwua-	danB	>	puAdanB
	1PL	two	CLF		
二人称	miA-	wwua-	danB	>	muAdanB
	2PL	two	CLF		

共時的には、puAdanBあるいはmuAdanBで一体化した人称詞になっていると分析する。ちなみに、＜複数人称詞単音節形+数詞+類別詞＞と言う構成は、数詞が「3」以上の時に使用される一般的な構成である。また、このことから、複数人称詞単音節形 piA-、miA-が、数詞+類別詞の前の位置においては許容されることがわかる。なお、以下の例文では、複数人称詞単音節形を、接辞付加形 kanB-naB/piA-naBで置き換えてもよい。

- (8) **piA-** tsiA- danB muB.
 1PL three CLF go
 「私たち三人は行きましょう。」
- (9) **piA-** pluA- danB muB.
 1PL four CLF go
 「私たち四人は行きましょう。」

次に、三人称には双数形はない。三人称で対象の数量が2である場合には、＜複数人称詞+数詞「2」+類別詞＞という構成で表現する。

- (10) **nthonC-naB** wwua- danB aCchiB muB.
 3PL two CLF together go
 「彼ら二人は一緒にいきます。」

2.4 人称詞の人称と数のまとめ

puAdanBという言い方はないとのことである。なお、Sposato (2015:302-305) は、北部ミャオ語（中国では湘西苗語とよぶ）にも同様の形式があることを報告している。ただし、この言語では、三人称の人称詞は人称詞表現全体の最後に位置する。

人称・数と、使用される人称詞との対応関係をまとめると、以下の表ようになる。ただし、一人称、二人称とも単数のみとし、一人称と二人称の複数は、単数にさらに二人称あるいは三人称が加わったものととらえる（表中の数字は人数を、 $\leq$ は当該数以上を表す）。

表3

指示対象			使用される形式	説明
一人称	二人称	三人称		
1			kanB	一人称単数
1	1		puAdanB	一人称双数
			kanB-naB, piA-naB	一人称複数
1		1	puAdanB	一人称双数
			kanB-naB, piA-naB	一人称複数
			(niB puA-danB)	一人称双数排除式
1	1	$1 \leq$	kanB-naB, piA-naB	一人称複数
1		$2 \leq$	kanB-naB, piA-naB	一人称複数
	1		ronA	二人称単数
	1	1	muAdanB	二人称双数
			ronA-naB, miA-naB	二人称複数
	1	$2 \leq$	ronA-naB, miA-naB	二人称複数
		1	niB	三人称
		$2 \leq$	niB	三人称
			nthonC-naB (+human)	三人称複数

2.5 三人称人称詞の機能

既に述べたように、三人称人称詞 niB は、数に関する厳密な規定はなく、数の概念を曖昧にして、複数の対象を指示することも可能である。例えば、次のテキストの一部を参照する。

(11) jeB danB aA-tanA -nonB tsoC- zroC-seA khenBtinC **niB** tuC wwuA- xanB zanC
 FLL CLF child DEM then tell definitely 3 obtain two CLF rise
 muB -waC neeB, **niB** coAtinA nduC -siA.
 go SFP FLL 3 decide run SFP

「その子は思った。彼らは2つの箱を引き上げたら、逃げるつもりなんだろう。」『油をたらせばくつつかない』

ここで使われている2つの **niB** は、文脈上既出の二人の人を指している。ただし、文脈上明確に複数であることを表現している人間名詞を指示する場合には、**niB** は使用しにくい様子である。以下の例では、**niB** が容認されず、**nthonC-naB** を使用した方がよいとの報告である。

(12) *teeAeB maA wwuA- danB tshiA lanB, **niB** jonC kanB -moA toAweC.

LOC exist two CLF speak speech 3 COP 1SG MO friend

(13) teeAeB maA wwuA- danB tshiA lanB, **nthonC-naB** jonC kanB -moA toAweC.

「あそこで二人人が話をしているが、彼らは私の友人だ。」

[那里有两个人说话, 他们是我的朋友。]

一方、文脈上明確に複数であることを表現している名詞でも、非人間の名詞を指示する場合には、**niB** の使用は問題がない。逆にこの場合には、**nthonC-naB** は使用できない。これは、**nthonC-naB** が人間専用であるためだと考えられる。

(14) kanB caA tuC puA- danB mbiB ndanC -tsaB. njaCpyoA kanB-naB coB **niB** nonA.

1SG fish obtain a.few CLF fish big PRT supper 1PL cook 3 eat

(15) *kanB caA tuC puA danB mbiB ndanC -tsaB. njaCpyoA kanB-naB coB **nthonC-naB** nonA.

「とても大きな魚を何匹か釣ったよ。晩御飯に煮て食べよう。」

[我钓了几条很大的鱼。晚饭我们煮它吃。]

(16) **niB** maB tuC puA- phonC aA-zruC yyonC -tsaB. ronA tiB **niB** luB panA kanB

3 buy obtain a.few CLF clothes nice PRT 2SG take 3 come give 1SG
lanC.

look

(17) ***niB** maB tuC puA phonC aAzruC yyonC -tsaB. ronA tiB **nthonC-naB** luB panA kanB lanC.

「彼女は着かきれいな服を買った。持ってきて私に見せてください。」

[她买了几件很好的衣服。把它（那几件衣服）拿过来给我看。]

次に、三人称の人称詞 **niB**, **nthonC-naB** は直示的な指示を行うために使用することができる。コンサルタントによると、その場合には同時に指などで指示対象を指し示す動作を伴うのが自然であるとのことである。

(18) njiC jiAjiC -moA jonC **niB**.

steal thing MO COP 3

「物を盗んだのは彼だ。」

[偷东西的是他。]

(19) jonC nthonC-naB.

COP 3PL

「彼らだ。」

[是他们!]

3. 人称詞の統語論

人称詞は、以下の3つの統語的ふるまいによって特徴づけられる。

(1) 人称詞は、類別詞と<類別詞 人称詞>という語順で共起することはできない。共起する場合には、<人称詞 類別詞句>という順序で共起する形式をとる。これは、人称詞が類別詞句の中に生起できないことを示唆しており、類別詞句内に生起できる名詞と異なる形式上の違いである。以下の例は、「私たち三人」という意味を意図した表現であるが、<人称詞 類別詞句 (=数詞+類別詞)>という順序は容認されるが、<類別詞句 人称詞>という順序は許容されないことを示している。

(20) kanB-naB tsiA- danB <◇◇1PL◇three◇CLF>

(21) *tsiA- danB kanB-naB <◇three◇CLF◇◇1PL>

なお、この場合には、一人称複数で piA-、二人称複数で miA- という形式も用いられる。これはすでに2.3節で述べたとおりである。

(22)

kanB-naB tsiA- danB szA-jonA muB. <◇◇1PL◇three◇CLF◇RCP◇lead◇go>

piA-naB tsiA- danB szA-jonA muB. <◇◇1PL◇three◇CLF◇RCP◇lead◇go>

piA- tsiA- danB szA-jonA muB. <◇1PL◇three◇CLF◇RCP◇lead◇go>

「私たち三人一緒に行きましょう」

(23)

miA-naB tsiA- danB aCchiB muB. <◇◇2PL◇three◇CLF◇◇together◇go>

ronA-naB tsiA- danB aCchiB muB. <◇◇2PL◇three◇CLF◇◇together◇go>

miA- tsiA- danB aCchiB muB. <◇2PL◇three◇CLF◇◇together◇go>

「あなたたち三人一緒に行きなさい」

(2) 人称詞は、指示詞とだけでは単位を構成できない。人称詞と指示詞が共起する場合には、人称詞と、指示詞を含んだ類別詞句を<人称詞 類別詞 指示詞>という順序で共起させる。これは、人称詞と類別詞を区別するふるまいである。

「その彼・あの彼」

(24) **niB** danB -eB <◇3◇CLF◇DEM>

(25) ***niB** -eB <◇3◇DEM>

「ここにいるあなたたち」

(26) **miA-naB** phoB -nonB <◇◇2PL◇CLF◇DEM>

(27) ***miA-naB** -nonB <◇◇2PL◇DEM>

(3) 人称詞は関係節の修飾も受けない。これは、人称詞と名詞及び類別詞を区別するふるまいである。以下の例では、関係節を[]で括ってある。

(28) *[taAnheeBnhaA daA -moA] **niB** jonC keeB-siB niB-piB aA-qeeAniB.

yesterday come MO 3 COP 1SG-wife 3-house uncle

「昨日来た彼は私の妻の兄です」

4. ミャオ語の人称詞の類型と変化

World Atlas of Language Structures (WALS) によると、単独で使用される人称代名詞 (independent personal pronoun) の複数形の形成法は、いくつかに分類される (Daniel 2013)。羅泊河ミャオ語の人称詞をこれに当てはめてみると、一人称、二人称に複数存在する人称詞は、それぞれがWALSの異なった類型に属することがわかる。それを表にしたのが表4である。

表4

	羅泊河ミャオ語	WALSによる類型
一人称	kanB-naB	人称語幹+名詞の複数接辞
	piA-naB	(人称+数) の語幹+名詞の複数接辞
	piA-	(人称+数) の語幹
二人称	ronA-naB	人称語幹+名詞の複数接辞
	miA-naB	(人称+数) の語幹+名詞の複数接辞
	miA-	(人称+数) の語幹

表4をみればわかるように、羅泊河ミャオ語における人称詞の複数形の形成法は、[1]人称語幹+名詞の複数接辞、[2] (人称+数) の語幹+名詞の複数接辞、[3] (人称+数) の語幹の3つの類型に分類される。すなわち、kanB-naBとronA-naBにおいては、kanBとronAはそれ自身が単数の人称詞であり、-naBは名詞の複数接辞としても使用される形態素であるので、[1]のタイプである。¹⁵ 次に、piA-naBとmiA-naBは、piA-とmiA-は人称と数のカバン形態素であり、それに -naBが付属したものであるので、[2]のタイプである。最後に、piA-、miA-は[3]のタイプである。

WALSは、羅泊河ミャオ語と同じ西部ミャオ語群に属するWhite Hmongについて、(人称+数) の語幹という[3]のタイプに属するとしている。他のミャオ語の状況を見ると、東部ミャオ語（貴州省台江、姬安龍 2010による）と北部ミャオ語（湖南省鳳凰、Sposato 2015による）もWhite Hmongと同様であり、以下のような複数形式を持つ。¹⁶

東部ミャオ語	WALSによる類型
pi1	(人称+数) の語幹
maŋ2	(人称+数) の語幹

北部ミャオ語	WALSによる類型
pɛu1	(人称+数) の語幹
mā2	(人称+数) の語幹

以上の他の3つのミャオ語の一人称と二人称の複数形式は、それぞれ羅泊河ミャオ語のpiA-とmiA-の同源形式である。ここから考えると、以下のような推定が可能である。羅泊河ミャオ語においては、他のミャオ語と同様、単音節のpiA-、miA-が本来の表現であった。それに名詞の複数接辞を付加するようになり、piA-naB, miA-naBという形式が生まれた。さらに、カバン形態素であるpiA-、miA-を、単数の形式に置き換えて、kanB-naBとronA-naBという形式が生まれた。

このように推定する理由はいくつかある。系統樹上、同じ西部ミャオ語群に属するWhite Hmongのみならず、西部ミャオ語群の外にある2つの言語においても、[3]のタイプの形成法がみられることがまずあげられる。他の2つの形成法は羅泊河ミャオ語における改新であるという説明が最節約的なのは明らかである。

次に、名詞の複数接辞を付加する形成法 ([2]のタイプ) が、ミャオ語の接触言語である、漢語における人称詞の複数形の形成法と同じである点が指摘できる。たとえば、漢語における 我们「私たち」は、一人称単数形 我に、名詞の複数接辞 -们を接辞して形成される。つまり、kanB-naB, ronA-naB及びpiA-naB, miA-naBは、漢語の形成法のカルクである可能性がある。

最後に、piA-naB, miA-naBとkanB-naB, ronA-naBの形成の歴史的順序であるが、後者が漢語のカルクの完成版であるとすれば、中間にカバン形態素を使用した piA-naB, miA-naBが現れるのは自然であること、また、現在には多くの話者が kanB-naB, ronA-naBを談話で使用していることから、こちらが新しい形式であると推察される

¹⁵ ただし、-naB は、どのような名詞にでも接辞できるわけではなく、人間を表す名詞に限定される。その意味で、この-naB という形態素の機能は、漢語の-men (們) と類比的である。

¹⁶ ただし、北部ミャオ語においても、複数を表示する接辞を付加することによる形成法は存在するようである (Sposato 2015:296-302)。

こともあげられる。以上から、カバン形態素としての piA-、miA-から、分析的で非余剰的なkanB-naB、ronA-naBへの以下のような順序での変化が推定される。¹⁷

piA-, miA- > piA-naB, miA-naB > kanB-naB, ronA-naB

[付録]

羅泊河ミャオ語の音素体系

1. 音節構造

ミャオ語の音節は、その構成が最大である強音節と、その構成内容に制限がある弱音節に分けられる。弱音節は、常に強音節に先行して現れる。弱音節の母音は後続母音に同化して発音される傾向にある。本稿ではこの母音を /ee/ と表記する。以下に、両者の音節構造を模式的に示す（非義務的要素を括弧に入れて示す）。

強音節の音節構造

[[C1 (C2)]_o [(G) V(Co)]_R / T] σ

弱音節の音節構造

[[C1]_o [V (=ee)]_R / T] σ

(σ: 音節, O: 声母, C: 子音, R: 韻母, G: 渡り, V: 母音, Co: 末尾音, T: 声調)

2. 音節頭子音 (C1)

文例においては以下のローマ字表記を使用する。それぞれの記号は、基本的にはIPA（国際音声字母）を踏まえたものであるが、ミャオ語の記述のための規約がいくつかある。それについては、記号の右肩に上付きの数字で注釈をつけた。

	Plain stop			Prenasalized stop ¹			Nasal			Continuant		
labial	p	ph ²	v ³	np	nph	nb	mm ⁴	hm ⁵	m	ww ^{6,7}		w ⁶
labio-palatal										yy		y
labio-palatal	pz ⁸	phs	vz	npz		nbz						
dental	t	th	d	nt	nth	nd	nn	hn	n	ll	hl	l
alveolar	ts	tsh	z	nts	ntsh	ndz					s	

¹⁷ この変化の順序が建てられるとして、一人称と二人称では、変化の速度が異なっている可能性がある。2.2 節で見たように、一人称では、＜人称語幹＋名詞の複数接辞＞である kanB-naB という形式がすでに圧倒的優勢となっているようだが、二人称では、＜（人称＋数）の語幹＋名詞の複数接辞＞である miA-naB もいまだよく用いられている。

alveolo-palatal ⁹	c	ch		nc	nch	ndzj	nnj	hnj	nj	jj	x	j
postalveolar	tr	trh	zr	ntr	ntrh	ndr						
velar	k	kh		nk	nkx	ngg			ng			
uvular	q	qh	r	nq	nqh	ngh					h	
labialized uvular	qw	qwh	rw	nqw	nqwh	nghw						

注1 Prenasalized stop 「前鼻音化閉鎖音」の鼻音部分については、調音位置にかかわらず/n/で表示する。この鼻音部分は、後続の閉鎖音と同器性の鼻音として実現する。

注2 閉鎖音の後の/h/は当該閉鎖音が有気音であることを示す。

注3 /v/より始まる欄に含まれる子音 (v, vz, d[ð], z, z[rz], r[ʁ], rw[ʁʷ]) は、すべて摩擦音である。ただし、/d/を破裂音で発音する話者も存在する。

注4 /mm/より始まる欄に含まれる子音 (mm[ʔm], nn[ʔn], nnj[ʔnj]) は、鼻音の開始前に声門閉鎖が起こり、その解除とともに鼻音が開始される調音によって発出されるものである。

注5 /hm/より始まる欄に含まれる子音 (hm[ŋ], hn[ŋ], hnj[ŋ]) は、すべて無声の鼻音である。

注6 /ww, w/ は、labio-velarである。

注7 /ww/より始まる欄に含まれる子音 (ww[ʔw], yy[ʔy], ll[ʔl], jj[ʔj]) は、当該継続音の開始前に声門閉鎖が起こり、その解除とともに継続音が開始される調音によって発出されるものである。

注8 /pz, phs/ 等におけるz, sはそれぞれ [z], [s] である。

注9 この列 (調音位置) のplain stop (c[te], ch[teh], ndr[ndz]) の非鼻音部分はすべて破裂音である。

3. 音節頭クラスター (C1 + C2)

音節頭のクラスターには、以下の表に示すように、両唇音と口蓋垂音の2種類がある。

	Plain stop			Pre-nasalized		
labial	pl	phl	vl	npl	nphl	nbl
uvular	ql	qhl	rl	nql	nqhl	nghl

4. 母音

固有語の音節には以下の表に示した8つの母音が見られる。/yu, yo, ya/ は、labialとlabio-palatalの後にのみ現れる母音である。これらの母音は、labio-palatalの後に現れる場合には、yを書かない (この環境では、/yu, yo, ya/ は、/u, o, a/と対立しない)。このほかに、比較的定着した借用語に現れる /z/ [z]があり、音声的には子音であるが、音韻的には母音に相当する。歯茎音の後にのみ出現する。

	front		back	
	unrounded	rounded	unrounded	rounded
high	i [i]	yu [y]		u [u]
mid	e [ɛ]	yo [œ]		o [ɔ]
low	ya [a]		a [ɑ]	

5. 末尾音

固有語の末尾音は/-n/ひとつである。/-n/は、口蓋垂鼻音[n]で実現するが、それ自身が脱落することもある。/-n/は常に母音を鼻音化する。このほかに、比較的定着した借用語に現れる/-i, -u/がある。

6. 声調

3つの声調があり、音素としての調類を、/A/, /B/, /C/という記号で表記する。A調は中降調、B調は高平調、C調は中昇調である。

調類	A	B	C
調値	42	55	24

[参考文献]

- Daniel, Michael. 2013. Plurality in Independent Personal Pronouns. Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary anthropology. (Available online at <http://wals.info/chapter/35>, Accessed on 2016-07-27.)
- 姫安龍 2012.『苗語台江話参考語法』 昆明：云南民族出版社
- Purnell, Herbert C. 1970. Toward a reconstruction to Proto-Miao-Yao. Ann Arbor, Mich.: University Microfilms.
- Sposato, Adam. 2015. A Grammar of Xong. A dissertation submitted to the Faculty of the Graduate School of the University of Buffalo.
- Sweet, H. 1875/6. Words, logic and grammar. *Transactions of the Philological Society for 1875/6*, pp. 470-83.
- 田口善久 2008.『罗泊河苗语词汇集』 東京：アジア・アフリカ言語文化研究所
- 田口善久 2015. 「ミャオ語の系統について」第37回チベット・ビルマ言語学研究会における発表（神戸研究学園都市UNITY）
- 王輔正 1994.『苗語古音構擬』 東京：アジア・アフリカ言語文化研究所

（たぐちよしひさ・千葉大学文学部）

A note on the grammar of Lan Hmyo: a sketch of its personal pronoun system

Yoshihisa TAGUCHI

This article describes the forms and the functions of personal pronouns in Lan Hmyo. Lan Hmyo is a Hmongic language spoken in Guizhou Province, China. The personal pronoun system of Lan Hmyo exhibits some interesting typological features: it distinguishes singular, plural, and dual in terms of number; it has three forms in first and second person plural. This article also analyses the diachronic process in which Lan Hmyo's dual forms have been composed from singular forms and other material, and explores the diachronic process in which the three forms in first and second person plural have come into being.